

# 日本の化粧の歴史

柳 真由

(小川 賢治ゼミ)

私は大学に入学し化粧をするようになった。化粧は面倒くさい。それをなぜわざわざ行わないといけないのか。私は日本の女性は身だしなみとして化粧をしないといけないという風潮があるように感じる。しかし、化粧をすることは自分を美しく見せ、それに加え肌の保護を担っていると言われていて。私は自分が苦手としている化粧はどのようにして始まってきたのかについて調べたいと思う。その中で社会の変化との関係について注目していきたい。日本人が化粧をすることにおいて今と昔ではどのような違いがあったのか、化粧に対する考え方や捉え方の違いについて調べまとめた。

## 化粧とは

まず化粧とは、紅・白粉などをつけて顔をよそおい飾ること、美しく見えるよう、表面を磨いたり飾ったりすることである。化粧を広い意味での身体加工ととらえるなら「入浴、洗髪、洗顔などでからだを清潔にする」「顔やからだの表面を紅や白粉などで彩色する」などが化粧に該当する（山村 p.3）。

現在に至るまで化粧は、時代による社会や生活の変遷、美意識の変化とともに、意味や表現を変え続けてきた。日本の化粧文化の歴史を大きく「元始化粧」「大陸伝来化粧」「伝統化粧」「近・現代化粧」の4つの期に分けることができる。元始化粧は、旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代のころ、大陸伝来化粧は飛鳥、奈良時代のころ、伝統化粧は平安時代以降、近・現代化粧は明治時代以降から現代のことで、その時代に日本人が行っていた化粧のことである（ポーラ文化研究所）。

## 第1章 元始化粧

### 1. 旧石器時代から縄文時代

日本列島に現在の私たちに似た顔つきや身体つ

きの人びとが暮らし始めたと言われていたのが、今から3~4万年前の旧石器時代の終わりごろと考えられている。大型の動物を狩り、食料や衣服にする生活をしてきた。その後、今から1万3千年前から約1万年続いた時代が縄文時代である。縄文時代の人々は狩猟や採集、漁労をして暮らした。石器が発達し、縄目模様が特徴的な土器が作られた時代である。「化粧=よそおうこと」と広く捉えると、縄文時代はすでに化粧文化があった。この時代の地層から漆塗の櫛が出土している。櫛で髪を梳かし、飾りとして使われていた。土偶や土面などの出土品には、顔面に線刻があるもの、赤く彩られたものがある。装身具として、貝を加工して作った腕輪や首飾り、耳飾りなども着けていた。縄文人にも美意識という考え方もあったようだが、厳しい自然に暮らす人びとにとって一種のまじない、病気や災いなどから身を守る意味も強かった（ポーラ文化研究所）。

### 2. 弥生時代から古墳時代

弥生時代のよそおいは、遺跡からの発掘品や中国の歴史書『三国志』の一部である2~3世紀ごろの倭人の社会や風俗を記した『魏志倭人伝』の中に記されている。「倭」と呼ばれていたころの日本の地理や風俗が記され、日本人のよそおいが記録された最初のものである。服装について、「男子は冠をかぶらず木綿の布で頭を巻き、衣は広い布を結び束ねるだけで縫うことはない。婦人は髪を結び、衣は一枚の布の中央に穴をあけて頭を通して着ている」（ポーラ文化研究所）と記されている。顔や手、足などに紅や白粉を塗り、美しく飾る習慣はこの時代からみられ、すでに化粧の慣習が存在していた。「男子は大小となく、皆黥面分身する。」黥とは入れ墨のことで、男性は顔や身体に入れ墨をしていると記され、呪術的な意味合いだったものが、次第に集団の印や飾りとなっていった。

また、「朱丹を以ってその身体に塗る、中国の粉を用うるがごときなり。」朱丹とは赤い顔料のことで、顔や身体に赤い色を塗っていると記され、遺跡から赤い色の原料となった花粉が発見され、頬に赤い化粧のある埴輪が出土している。

弥生人はネックレスや簪などの装身具を身に着けていた。縄文人と同じように、動物の牙や角、貝などを巧みに細工して、ネックレスや腕輪、髪飾りなどを着けていたが、当時の人々は動物の牙や骨のアクセサリを身に着けることで動物の持つ呪力や霊力を得ようとしていたのかもしれない。

大陸との交流で製造技術が伝えられ青銅や鉄、ガラス製品が新しい装身具として加わった。ガラスの小玉や管玉で作られたネックレスがあることからガラスは他のものにはない美しさで弥生人を魅了したと言われている。呪術的な意味合いがあった装身具は、王や巫女などの特別な身分の形成とともに身分を顕示するものとなった。

古墳の発達とともに埴輪が表現の一つとなり、その時代の服装を明確に表している。5世紀から7世紀の埴輪の服装は、上衣と下衣の形式で、上衣は男女同じかたちで、筒袖で腰までの丸首、前あきの身頃を上下2ヶ所で結び留め、下衣は、男性はズボン風で膝下を紐で結んでおり、女性はスカート風に腰に巻いたものであった。髪は男女ともに長く伸ばしていて、男性は両耳のあたりで束ねた髪型で、冠や帽子を被り、女性は頭の上にひとつに束ねて前後にからげた結髪で飾り櫛や鉢巻をしていた。埴輪の人物には、身分に相応しい耳飾り、首飾り、指輪、足飾りなど数々の装身具が見られ、素材は瑪瑙めのうや水晶のほか時代がすすむと金、銀が使われ、権力者は貴重な金や銀で華やかに身を飾って、身分の優位をアピールしていた。3世紀後半の古墳時代の遺跡から、顔や身体に化粧がなされた埴輪が出土しており、日本人が化粧をしていたことを示す最古の史料となる。

紅に使われた赤は太陽や血を表し生命を連想させる色というのが有力な説である。今よりも死への恐怖や自然への畏怖の念が強かった時代、赤い色は人々を護る呪力を持った特別な色である。弥生時代、古墳時代の人々による化粧は、呪術的な意味合いであることが強かった（ポーラ文化研究所）。

## 第2章 大陸伝来化粧

### 1. 飛鳥時代から奈良時代

飛鳥時代から奈良時代は化粧文化にとって大きな転換期である。着物と帯のファッション、髪を結う日本髪、白粉に紅の化粧の時代となった。今から約1400年前に日本伝統のよそおいが確立した。飛鳥時代を迎え、これまでの化粧のもつ呪術的な意味合いから変化した。文化や社会の発展とともに、化粧の意味や方法も変わり、美意識の化粧となった。現代のように自分を美しく魅力的に見せる考え方となった。海外の最新の情報を取り入れ、贅沢なものを手に入れられる立場だった支配層の宮廷女性たちは、大陸の衣装や化粧を積極的に取り入れた。絹織物に華やかな色のついた唐風の衣装を身にまとい、化粧は、白粉を塗り、紅を使ったポイントメイクを施した。

大陸から伝来した文化の模倣からはじまり、華やかな衣装、艶やかな髪型や整えられた化粧の美しさは、それまでの呪術の意味合いや権威の象徴としての衣装や化粧とは違う「美しさの表現」「おしゃれ」としてのよそおいを目的とするようになったのである。

大陸では隋が中国を統一し、日本は遣隋使を派遣していた。大陸と交流することで、仏教が伝来し、様々な文化や品物が伝わった。この時、新しい化粧法や紅、白粉、香といった化粧品も輸入され、日本に新しいメイクの歴史が始まった。当時のメイクは、鉛で作られた白粉を塗り、ポイントとして唇に紅をさすというもので、当時の中国文化の影響が現れている。特に鉛を酢で蒸してつくる白粉の製法が伝わり、新しい鉛白粉は、それまでの貝殻や米の粉などの白粉よりも、格段にツキ、ノビがよく「肌を白く美しく見せる」ことができるようになったのである。都に住む宮廷女性は顔に白粉を塗り、紅を使ったポイントメイクをしていた。

奈良時代中期、日本で描かれた「鳥毛立女屏風」に当時の女性の様子が描かれており、唐風メイクを見ることができる。唐風メイクは、紅を赤く塗り、額中央には花鈿、口元に靨鈿というカラフルな色で花や星を描くポイントメイクを施しているのが特徴的である。都に住む宮廷女性は先進国の

最新ファッションやヘアスタイルを競って取り入れ、おしゃれをすることが上流階級の文化人としてのステータスとなっていた。こうした中国大陸様式の化粧を実現した鉛白粉の登場は、日本の化粧文化に白い肌への美意識を誕生させたのだと考えられる。

古代社会では身を護る呪術としての意味合いだった赤の化粧は白の化粧へと変わり、日本の化粧は白い肌への憧れ、おしゃれ意識の化粧への道のりを歩み始めた（ポーラ文化研究所）。

### 第3章 伝統化粧

#### 1. 平安時代

平安時代になると遣唐使が廃止されるなど次第に大陸文化の影響は薄れていき、代わって貴族中心に日本独自の文化が芽生え始めた。華やかな唐風文化から優美な国風文化へと変化した。

平安貴族の女性たちは寝殿造の昼でも薄暗い部屋で生活していた。そうした環境に適した、色鮮やかな絹の衣装を何枚も重ねた十二単に身をつつみ、服のボリュームに合わせるように、垂髪という黒髪を長くまっすぐに伸ばしたヘアスタイルが代表的なものとなった。平安美女の第一条件は丈なす黒髪である。長い豊かな黒髪を扇のように広げた様子が美しいと讃えられていた。その髪の長さは、背丈より30cm長いとされており、顔や肌の白さを引き立てるために漆黒の髪は欠かせないものであった。しかし、美人の条件である黒髪は、長いだけでなく艶やかな黒髪でなければならない。そのため、ゆする（米のとぎ汁）や灰汁（灰を溶かした水の上澄み）を洗髪料として使っていたと考えられている。平安時代の特権階級である貴族の宮廷での暮らしの環境や美意識が新たなよそおいの様式を作り出した。その後、美人像の基礎となる美人観が培われることになる。「美人＝白い肌」という白粉化粧の美人観が貴族文化の審美観となった。白い肌の美しさにはいくつか説があり、戸外の労働をしない日焼けのない肌は高い身分である、皮下脂肪で透明感のある肌は成熟した女性を想起させ好ましく思わせたなど言われている。このようなことから白い肌は、女性的な美しさ、高貴なものへの憧れとなり、美人の象徴となった。

奈良時代に見られた唐風メイクは見られなくなり、宮廷メイクへと変化する。宮廷女性は、鉛から作る鉛白粉や水銀を原料とする軽粉の白粉で顔を白く塗り、紅花の紅を小さく口元にさし、頬にも紅を施し、顔を彩っていた。宮廷女性の影響を受け、平安貴族たちによって、白粉・紅・お歯黒・眉化粧など日本独自の伝統化粧の基礎が築かれたのである。日本の伝統化粧に使われた色は、白粉の白・口紅や頬紅の赤・お歯黒や眉化粧の黒であった。この三色は西洋の化粧文化が日本に伝来するまで、千年以上にわたって化粧の基本色となった。眉化粧は飛鳥・奈良時代では眉を形づくるメイク法であった。それが生来の眉をすべて抜き白粉を塗った上に眉墨で本来の眉の少し上くらいの位置に別の眉を描く眉化粧をするようになった。お歯黒は、別名涅歯・鉄漿といわれ、五倍子粉とお歯黒水を用いて歯を黒く染めていた。お歯黒は眉化粧とともに、宮廷などの上流階級では女性が十歳前後になると成人の証となる通過儀礼として慣習化していった。平安時代の末期になると公家の男性も白粉・紅・眉化粧、お歯黒をするようになり、化粧は高い身分や階級を示す象徴としての意味を持つようになった。

白い肌を目指すようになりスキンケアも行われるようになる。洗顔はスキンケアを意識したものではなかったが、川や池での沐浴で身体の汚れを落としていた。原始宗教では病気や災害などの穢れから逃れるために「みそぎ・はらい」として、水による浄めが行われていた。洗顔の重要な出来事となったのが仏教伝来である。澡豆という小豆の粉でつくる洗浄料がある。小豆などの豆粉には汚れを落とす発泡性の物質サポニンが多く含まれていることから古くから洗浄料として活用されていた。上流階級の女性は、澡豆を洗浄料として顔や髪を洗っていたと考えられている。このことから洗顔作用が肌を美しく保つために行っていた行為と気づいていた人もいたかもしれない。保湿につながる行為も行っていた。日差しや寒さから肌を護るために獣の脂や植物の汁を肌に塗っていた。肌を外部からの強い刺激から護ることがスキンケアの始まりとなった（ポーラ文化研究所）。

## 2. 鎌倉・南北朝・室町・安土桃山時代

この時代から髪型にも変化が現れた。衣服の簡略化が進み、長く後ろに垂らした髪が束ねられるようになる。貴族社会では丈なす黒髪が美女の第一条件であったのが、武家社会になると女性の髪は少しずつ短くなり、生活環境にあった活動的なスタイルへと変化していった。鎌倉時代では、貴族や武家の上流階級の女性の間では長い黒髪が美しさとステータスであり続けていたが、一般の女性たちの髪は活動しやすいよう短くなっていった（ポーラ文化研究所）。

室町時代になると、武家の制度や礼儀作法が整備され、化粧に関することも記述されるようになった。この時代に白粉や紅などを扱う職人などが『七十一番職人歌合』といったものに描かれるようになった（化粧の文化史）。

室町時代末期から安土桃山時代頃に徐々に髪がまとめられるようになり、江戸時代の結髪の元祖となる唐輪髷が発展した。武士による権力争いが続いていた時代である。社会の人々の生活は不安定なものであったが、女性のよそおいは古い慣習から新たな日本様式の創造へと動き出していった。女性の身だしなみやよそおいは武家社会に適合した様式へと変化し、化粧は貴族階級から武家階級、そして庶民にまで広がった。

鎌倉時代以降も白粉化粧は白い肌を作るための化粧として使われていた。鎌倉時代から安土桃山時代の間は白粉化粧の用途や効果など大きな変化は見られなかったものの、白粉の種類が増えたことがこの時代の特徴として挙げられる。日本で古くから使われてきた白粉は、米粉などの穀物から作られた植物性の白粉と、鉛系のハフニと水銀系のハラヤで作られた鉱物性の白粉の二種類がある。古代から中世にかけて穀物の粉や胡粉、鉛白粉が使われていた。鉱物系の白粉は肌へのツキ、ノリがよく、様々な地域で多くの女性に広まった。

平安時代までは眉化粧は宮廷や貴族階級が行っていたが、この時代になると社家や巫女や武家の女性、遊女にまで行われるようになった。平安時代までの眉化粧は権威の象徴、身分、階級などを誇示するものであった。しかし、公家を真似て武家階級も眉化粧をするようになった。そして下の階級にも広がりおしゃれの化粧へと進化していっ

たとえられる。一般庶民にも広がるようになった化粧は、伝統を基としながら時流にそったものへと変遷していくこととなる（ポーラ文化研究所）。

## 3. 江戸時代

庶民が化粧に親しみをもち、化粧を行うようになったのは江戸時代のことである。経済の発展に伴い豪商が増加する元禄期（1688年～1704年）には商品の流通網が整った。そして化粧品が京都や大坂に住む庶民の手に届くようになった。庶民は着物と帯の服装、髪を日本髪で結び、白粉に紅の化粧を施す、伝統的なよそおいをするようになり、時代劇などでよくみるファッションとなった。この時代の社会を担う主役たちの世界観や美意識、慣習、生活などを反映しながら変化、発展し続けた。

江戸時代前期は、武家の質実剛健な気風が残り、武家の上級階級が文化の担い手となっていた。封建制度のもと身分制度が厳しく守られた時代で、武家女性の礼儀作法は決められており、よそおいも化粧もそれにそったものでなければならなかった。慶安3年（1650年）、京都で出版された『女鏡秘伝書』という女性用の教訓書があり、江戸時代前期の女性は、教訓書や目上の女性から教えられた儀礼や慣習にそった身分や年齢にふさわしいよそおい、化粧をしなければならなかった。公家文化を模範としながらつくられた武家文化では、女性の生活は、生活慣習、作法、化粧、よそおいなど、身分・家柄に応じたものでなければならなかった。武家女性の白粉・紅の化粧、お歯黒、眉作り・眉剃りなど身嗜みとしての化粧は、個人の美しさを表現するものではなく、身分や年齢、未婚、既婚を表すため、ルールや定められた様式にそったものだった。武家の女性は庶民の女性とは身分の違いがはっきりわかるよそおいでなければならなかった。お歯黒をして半元服、眉を剃り落として本元服という成人女性となる通過儀礼から、結婚する年頃になると歯を染め、出産すると眉を剃り落とすのが習慣となった。

化粧とともに女性が容姿のうえで大事にした髪型は、大きな進展をする。公家や武家階級の女性は依然として垂髪だったが、しだいに髪を前髪・鬢・髷に分けて結び上げる髪型が出来上がっ

ていき、江戸時代を通じて基本となった4つの髷、島田髷、兵庫髷、勝山髷、笄髷が主流となった。髪型も化粧と同様に年齢や身分・階級、未・既婚、職業までを表すものとなった。

江戸時代中期になると、数々の生産業や流通、商業が発達して町民が力をつけ、町民の経済力を背景に武家文化と対抗する町民の文化が生まれた。封建制度にしばられた武家女性の装いや化粧に対抗して、女性に化粧は欠かせないもの、その上で自由に楽しむものとする町民のよそおい文化が育まれていった。

ファッションシーンで一躍脚光を浴びたのが、遊女や歌舞伎役者たちである。中でも注目されていたのが、美しさは女性の価値であると世間がみるようになったことだ。庶民女性の意識も変わり、装いも化粧も見られることを前提に「美しく見せる」という志向を強めていった。化粧にも様々な流行が生まれ、当時の女性たちが一番化粧で気を使っていたのが白粉化粧である。庶民の女性には、白粉は濃くといった武家階級のような決まりはなく、その時々流行に合わせて、自分の顔に似合うように白粉を仕上げていた（ポーラ文化研究所）。白粉は鉛白粉が使われ、水で溶き手や刷毛で付けていた。紅は紅花から作り、唇、頬、爪などに塗り、白粉と同様に薄くつけることが上品とされた（化粧の文化史）。白粉化粧は地域でも異なり、江戸の化粧は、京都・大坂の濃化粧に対して薄化粧が好まれ、粋な化粧を好む風潮が見られた。

江戸時代後期、江戸の町の人口は100万人以上に達したといわれ、この半分が町人で、文化の担い手も町人となっていた。流行の発信源は人気の遊女や歌舞伎役者で、浮世絵が髪型や化粧の文化の流行を広める媒体であった。平和が続く社会にも生活にもゆとりある時代のなかで、着物に帯の服装、髪を結い上げ櫛や簪で飾る日本髪、白粉、紅、眉墨などでメイクアップした化粧の美しさを多くの女性が競い、楽しみ、日本独自の様式美を完成していった（ポーラ文化研究所）。紅を濃くつけて笹色（玉虫色）に見せることが流行っていた。紅花の生花から作った紅は、紅一匁、金一匁といわれるほど高価なものであった（化粧の文化史）。庶民の化粧に対する美意識は、それまでの「濃化粧」から「薄化粧」へ移っていった。

江戸美人の条件は何と言っても白い肌で、美肌意識とスキンケアが現れた。江戸時代のスキンケアでまず普及したのは洗顔料で、入浴や化粧前の洗顔に「糠袋」や「洗い粉」が使われるようになった。広く使われた洗顔料が糠で、精米時に米からとれる糠は身近なものであったため、洗顔が日常の習慣になると誰でも手に入る洗顔料として、庶民に浸透していった。糠の使い方は、絹や木綿の布を袋状に縫い合わせた「糠袋」のなかに糠を入れ、ぬるま湯に浸してしぼったら、顔や全身の肌をなでるように滑らせて洗っていた。次に化粧水が肌の手入れに欠かせないものとして愛用された。メイクアップにあたる白粉や紅化粧が女性の身だしなみとして普及すると、白粉をきれいにつけるための化粧下地料として化粧水が使われるようになっていったのが始まりである。庶民の間で白粉化粧のトレンドが薄化粧になると、女性たちの意識は素肌美に向けられるようになり、化粧水は肌を整えるための化粧品となった（ポーラ文化研究所）。

## 第4章 近・現代化粧

### 1. 明治時代

江戸時代まで当たり前だったお歯黒や眉剃りが古い化粧として否定され出した。欧米の文化を受け入れる過程で、これまでの日本にない化粧品や化粧法、化粧技術が発展した。宮中まで巻き込んだ外見上の改革は、明治初期から矢継ぎ早に進行していった（山村 p.86.87, p.92）。明治3年（1870年）太政官布告で華族にお歯黒と眉剃りが禁止された。明治6年（1873年）に、昭憲皇太后が率先してお歯黒をやめたのを機に一般の女性たちもやめるようになった。明治10年（1877年）頃からは、鉛の毒性が問題となったのを契機に無鉛白粉が研究され、明治37年には商品化された（化粧の文化史）。

明治時代は印刷技術の進歩により、新聞や雑誌などの活字メディアが台頭した時代だった。明治14年（1887年）を過ぎるころから、化粧品の使い方、季節ごとの化粧品、流行の髪形などの美容関連記事が増え、明治末期には美容関連の記事や化粧品広告が増加した。

明治時代を通して女性の化粧を振り返ると、化粧の変化はゆっくりとしたペースだった。明治初期に廃止を唱えられたお歯黒や眉剃りでさえ簡単になくならなかった。旧来の化粧習慣を変えるのに時間がかかり、上流階級や富裕層以外は、明治末期になっても和服のままだった。服装より先に一般女性が洋風スタイルを取り入れたのは髪型である。女性の髪型は、伝統的な日本髪をアレンジした束髪が考案された。

明治末期の化粧意識は、明治40年に発行された『化粧かゝみ』で定義されており、身嗜みは礼儀であることから江戸時代と同様、派手であってはならないものとされていた。お歯黒や眉剃りの制約から開放され、外見上は少しずつ洋風化が進む明治末期でも、内面は江戸時代のままに、自分の好みより他者の目を意識した化粧が求められた。近代化がもたらした「洋風化粧」という新しい風は、次の時代になると大衆化という気流に乗って広がり、女性たちの化粧意識を変化させていった（山村 p.86~124）。

## 2. 大正時代

女性の社会進出とともに、スピード化粧や対人関係を円滑にするための化粧が少しずつ提案され出した（化粧の文化史）。女性にとっての化粧は社会生活をする上での大切なマナーとなったのもこの時代である（化粧の歴史）。明治時代まで白一色だった白粉も多色白粉へと発展し、口紅もそれまでの紅花からつくったものから、顔料や染料を配合した棒状口紅へと移っていった（化粧の文化史）。

大正時代から人々の生活は豊かになり始め、都心を中心に、衣食住など日常生活のなかにも西洋の生活習慣が取り入れられるようになった。この時期の化粧の大きな特徴として、上流階級や富裕層を中心におこなわれていた洋風化粧が一般女性の間で少しずつ浸透したことがある。女性誌や化粧品会社は新しい時代の女性に適した化粧として洋風化粧を積極的に啓蒙した。

スキンケア化粧品が進化した時代であった。大正時代の主なスキンケア製品は、石鹸や洗粉などの洗顔料、化粧水、クリームだった。これらは明治時代とさほど変わりはないが、品ぞろえが明治時代より充実し、当時の最新知識や技術を投

入した国産化粧品が開発された。スキンケアの主力であるクリームも国産品の品ぞろえが豊富になった。クリームは、化粧落とし用のコールドクリーム、マッサージ用、化粧下地、栄養クリームといったようにその場に応じた機能性の優れた商品が開発されるようになった（山村 p.126~129）。

## 3. 昭和時代

昭和になると、飛鳥時代から続いた美しい肌は「白い肌」から「自然な健康的な肌」へと美意識が変わった（化粧の歴史）。「健康色」「濃肌」「オークル」など、濃い目の色が加わった。白粉の白の伝統的な美意識に肌色が割り込んで定着した背景には、女性の生活が以前と比べて活動的になったことが挙げられる。肌色の白粉は洋装に合う化粧として、活動的な近代女性を象徴する化粧として、若い女性を中心に流行していった（山村 p.133）。女性の社会進出と共に化粧の在り方も女性の生き方、個性を表す「自己表現」へと変化していった（化粧の歴史）。

洋装に洋風化粧の時は唇の形にそってつけ、和服に濃化粧の時は小さめにつけるなど、その時々々の服装に合わせて口紅の描き方を変えるようになった（山村 p.139）。昭和20年代中ごろ、アメリカ文化に影響を受けた「光る化粧」が流行した。その化粧法は下地に油分を塗り、その上に粉白粉やパンケーキを塗る化粧法で、肌に自然な艶が出るため「光化粧」と呼ばれた。日本では昭和30年代にはピンク色の肌、40年代には小麦色の肌、50年から60年代には白色の肌、という流行がみられた。

現在の女性が化粧に求めているものは、素肌感を活かした内からにじみ出るような自然な艶のあるメイクである。光の効果を最大限に利用して生まれる艶は平面的な日本人の顔に立体感を与え、きめの細かい潤い肌に見せることができる。日本人の化粧は日本の歴史の中で社会制度や女性の生き方と共に変化してきた（化粧の歴史）。

第二次世界大戦が終って昭和26年（1951年）頃から、アメリカの雑誌や映画などの影響を受けた。昭和29年（1954年）、日本にアメリカからパンケーキ（固形白粉の商標名）が紹介された。これ以後メイクアップ化粧品が一般に注目され、関心

が集まりはじめた。昭和35年(1960年)以降になると、化粧のポイントがアイメイクと口元を強調する傾向に移り、昭和50年(1975年)以降、学生や20代の女性中心にサーファールックや太い眉が流行した(化粧の文化史)。

#### 4. 現代

現在では個性的なメイクアップや爪を美しく装飾するネールアート、機能を持つスキンケア製品や、美白などの薬用化粧品が注目されている。江戸時代のように色白であることが美人ということではなく、多様な目的に合わせた製品、また肌への有用性を期待する時代になった(化粧の文化史)。現代は化粧品の質も高くなり、TPOに応じて化粧も工夫するようになってきている。TPOに加え、光環境(照明)を意識した化粧をすることによってより美しい自分を表現することができるだろう(化粧の歴史)。

1990年代後半から茶髪・細眉・小顔メイクで女性たちの美容意識は高まっていった。2000年代の女性たちは、ヘアエクステ、まつ毛パーマ、まつ毛エクステ、黒目強調コンタクト、ジェルネールなど、化粧品だけでは表現できない領域の、美容表現にまで手を広げ、空前の美容ブームが到来した。癒しを求め日本女性が本来好むカワイイ表現として、涙袋メイクや湯上りのほせチークが現れ、眉の色は明るくなった。2000年代以降メイクの色味は技術の進化とともに、なじみ系ヒューマンカラーの長い流行を経て、2010年代は色戻りの時代となった。

過去の社会・景気動向と化粧の関係を見ると、景気が良くなると明るい色の口紅や太眉が主流となり、凛とした元気なメイクアップが流行する傾向があり、景気が悪くなると、眉が細くなるなど、頼りなげな冷めた表情のメイクアップが流行る。天災や情勢不安があると、メイクアップがナチュラル回帰するなどの傾向がみられ、最近では、口もとに色が戻り、太眉の傾向が続いていることより、景気の上向き傾向や好景気への期待が化粧に現れていると捉えることもできる(「化粧は時代を映し出す」)。景気の上向き傾向や好景気への期待が化粧に現れていると捉えることができ、女性の化粧が世の中の雰囲気=世相を反映しており、女

性の顔が社会背景や経済動向などを含む時代の空気と共に変化しているといえる(日本女性の化粧の変遷100年)。

### 第5章 時代の変化と化粧

化粧に対する意味合いは時代の変化とともに変遷してきた。縄文時代の人にも美意識があった。しかし、厳しい自然に暮らす人びとにとって化粧は一種のまじない、病気や災いなどから身を守る意味も強かった。弥生時代になると、呪術的な意味合いがあった装身具は、王や巫女などの特別な身分の形成とともに身分を顕示するものとなっていった。一方で、弥生時代、古墳時代は死への恐怖や自然への畏怖の念が強かった時代だったため、呪術的な意味合いも強かった。

飛鳥時代から奈良時代は化粧文化にとって大きな転換期だった。大陸から伝来した文化の模倣からはじまり、華やかな衣装、艶やかな髪型や整えられた化粧の美しさは、それまでの呪術の意味合いや権威の象徴としての衣装や化粧とは違う「美しさの表現」「おしゃれ」としてのよそおいを表すようになった。中国大陸様式の化粧を実現した鉛白粉の登場は、日本の化粧文化に白い肌への美意識を誕生させた。古代社会には身を護る呪術としての意味合いだった赤の化粧は白の化粧へと変わり、日本の化粧は白い肌への憧れ、おしゃれ意識の化粧へと変化した。

平安時代の末期になると公家の男性も白粉・紅・眉化粧、お歯黒をするようになり、化粧は高い身分や階級を示す象徴としての意味を持つようになった。平安時代までの眉化粧は権威の象徴で、身分、階級などを誇示するものであった。しかし、鎌倉・南北朝・室町・安土桃山時代では公家を真似て武家階級も眉化粧をするようになり、化粧は下の階級にも広がり、おしゃれの化粧へと進化していった。江戸時代には、武家女性の白粉・紅の化粧、お歯黒、眉作り・眉剃りなど身嗜みとしての化粧は、個人の美しさを表現するものではなく、身分や年齢、未婚、既婚を表すため、ルールや定められた様式にそったものだった。平和が続く社会にも生活にもゆとりある時代になり、着物に帯の服装、髪を結び上げ櫛や簪で飾る日本髪、白粉、

紅、眉墨などでメイクアップした化粧の美しさを多くの女性が競い、楽しみ、日本独自の様式美を完成していった。庶民の間で白粉化粧のトレンドが薄化粧になると、女性たちの意識は素肌美に向けられるようになり、化粧水は肌を整えるための化粧品となった（ポーラ文化研究所）。

明治時代がもたらした近代化という「洋風化粧」の新しい風は、次の時代になると大衆化という気流に乗って広がり、女性たちの化粧意識を変化させていった（山村 p.124）。女性の社会進出とともに、スピード化粧や対人関係を円滑にするための化粧が少しずつ提案され出した（化粧の文化史）。女性の社会進出と共に化粧の在り方も女性の生き方、個性を表す「自己表現」へと変化していった（化粧の歴史）。2000年代以降メイクの色味は技術の進化とともに、なじみ系ヒューマンカラーの長い流行を経て、2010年代は色戻りの時代となった（日本女性の化粧の変遷100年）。

## おわりに

化粧は時代とともに変化を続けている。昔は呪術的な意味合いであった化粧だったが、今では個性を表す一つとして化粧がされている。決まった化粧方法ではなく、多種多様な化粧方法が生み出されている。化粧は身嗜みと言われており、服装と同様、自己表現の場で、固定概念のないものだ。何かに縛り付けられることなく、その人、その場の目的に応じた化粧がこれからも生み出されるのではないかと思われる。化粧をすることが自己表現に繋がり、自分自身で表現することで他者からの捉え方も変わるのではないか。現在の人々は化粧をすることで自分をさまざまな見せ方をすることができる。化粧には良い面もあり悪い面もあるだろう。現在化粧は女性だけがするものではなくなってきた。男性も化粧を行い自己表現を行っている。化粧＝女性という考え方が古くなってきている今、新たな化粧方法が発見され、歴史の大きな変化になっていくのではないか。化粧をうまく活用し表現できれば、今後の化粧の重要性がもっと社会で大きくなっていくのではないか。

## 参考文献

- 阿部 恒之・浅井 泉・大坊 郁夫など、2006、『化粧心理学 化粧と心のサイエンス』（資生堂ビューティーサイエンス研究所編）フレグランスジャーナル社
- 石田 かおり、2000、『化粧せずには生きられない人間の歴史』、講談社
- 平松 隆円、2020、『化粧にみる日本文化 だれのためによそおうのか？ 新装版』、水曜社
- 山村 博美、2021、『化粧の日本史 美意識の移りかわり』、吉川弘文館
- 赤からはじまる、古代日本の化粧。https://tryaging.hatenablog.com/entry/2017/12/22/210536（閲覧日：2022年10月11日）
- 化粧の社会学、https://www.jstage.jst.go.jp/article/senshoshi1960/27/11/27\_11\_471/\_pdf-char/ja（閲覧日：2022年12月27日）
- 化粧の文化史—日本化粧品工業連合会、https://www.jcia.org/user/public/knowledge/history（閲覧日：2022年10月10日）
- 化粧の歴史—大正時代～現代—ALG、https://alg.jp/blog/light\_make1/（閲覧日：2022年12月15日）
- 「化粧は時代を映し出す」～日本女性の化粧の変遷～、https://corp.shiseido.com/jp/releing/2366-j.pdf（閲覧日：2022年12月27日）
- 日本アートメイク推進協会、https://artmake-society.jp/（閲覧日：2022年10月10日）
- 日本女性の化粧の変遷100年—資生堂ヘアメイクアップアーティスト https://hma.shiseido.com/jp/info/p20170110\_1824/（閲覧日：2022年12月17日）
- 日本人の感性（美意識の変化）、https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h30/hakusho/r01/pdf/np101300.pdf（閲覧日：2020年12月27日）
- ポーラ文化研究所、https://www.cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/culture/cosmehistory/7.html（閲覧日：2022年10月11日）
- 弥生時代の歴史、弥生人の化粧や入墨の風習、https://camera-gakkou.com/6-yayoijin/entry45.html（閲覧日：2022年10月12日）